

大学生の飲酒に関する研究（４） 中日本自動車短期大学生について

水野敏明・大塚三雄・橋本真弓

はじめに

大学改革が始まって久しいが、本学は2001年度生からカリキュラムが全面改正され、教養科目24単位中、卒業要件単位数は11単位ですべて選択科目（但し基礎数学のみ指定履修）となった。健康科学1単位は、後期に15時間7コマ開講しており、この中で飲酒と健康について1コマ開講している。2001年度生の受講者率（1クラス60人）は約60%であった。これらの学生に対して、教育内容の充実を図るべく、健康調査を実施してきた。中でも我々は、大学生の飲酒に関する調査研究を1986年（昭和61年）から実施しており、すでに4回にわたって^{1,2,3,4)}報告している。しかしながら毎年大学生・未成年者の問題飲酒がマスメディアにより、枚挙にいとまがないほど報道^{5,6,7,8,9,10)}されている。特に毎年新学期は合宿オリエンテーション、或いは新入生歓迎コンパ等で「イッキ飲み」による急性アルコール中毒が報告されている。2002年4月は某市立大学の合宿オリエンテーションで医学部の歓迎会において、学生達が救急車で病院に4人運ばれた¹¹⁾という。本学においてはこのような報告は受けていないが、特にこれらの問題飲酒は生命に直接影響するために、今回は今までの調査項目に加え、大学生が飲酒に関してどの程度の知識、つまりどの程度教育を受けてきたかについても調査し、検討を加えたものである。

調査対象及び調査方法

調査対象は本学の1年生（2002年度生）でスポーツIを選択している学生283名。調査は前期最終授業時間（H14. 7. 中旬）に筆者らが学生に調査用紙を配布し、その場で回収した。回収率100%であった。

なお、女子学生は少数であるため対象者から除外した。

結果と考察

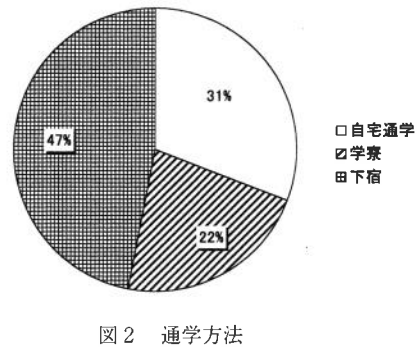
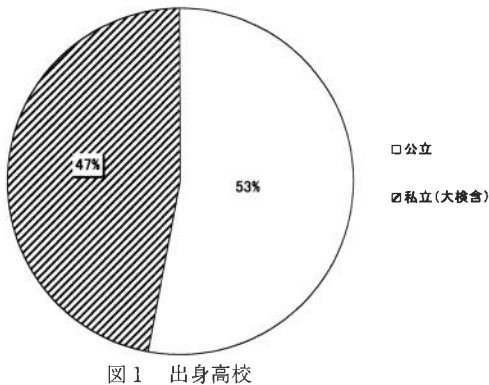
（１）対象者について

出身高校（図1）は公立高校53%と私立高校47%でほぼ同じ割合で、通学方法（図2）では下宿が47%、自宅通学が31%、学寮が22%の割合であった。クラブ或いはサークル活動の有無を表1に示す。所属なしが83%で圧倒的に多い。運動系は11%、文化系は1.4%、同好会・サークル所

属は4.6%であった。クラブ活動或いはサークル活動をしている学生はわずか17%であった。

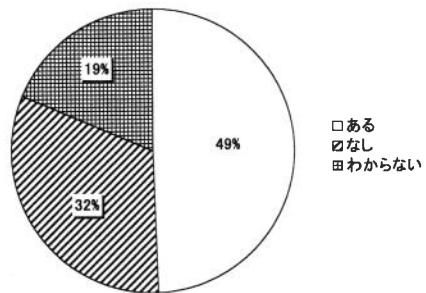
表1 クラブ活動

	N	%
運動系	31	11.0
文化系	4	1.4
同好会・サークル	13	4.6
所属なし	235	83.0
計	283	100.0



(2) 飲酒教育の有無

中学および高等学校で飲酒について教育を受けたかどうかについてみたものを図3に示す。約半数が教育を受けていることがわかる。しかし受けていない者が32%，受けたかどうかわからない者が19%であり，半数の者は飲酒教育に対しての意識および知識が無いものと思われる。



(3) 飲酒教育の内容項目

教育内容の項目は、本学の選択科目「健康科学」講義で実施している内容^{12,13)}を項目にあげ、複数回答で調査した。回答の多い順に並べたものを表2に示す。

教育内容でみると、飲酒が身体に及ぼす影響、急性アルコール中毒、飲酒運転については半数以上の者が教育を受けているが、内容がより詳細になる程、教育を受けている者が少なくなる。飲酒運転については、2002年6月に道路交通

表2 教育内容項目

	N	%
アルコールの身体におよぼす影響	106	75.7
急性アルコール中毒について	106	75.7
飲酒運転について	86	30.4
アルコールの吸収と代謝	47	16.6
酪酐について	28	9.9
血中アルコール濃度について	26	9.2
問題飲酒について	16	5.7
適正飲酒について	16	5.7
飲酒がスポーツに及ぼす影響	12	4.2
日本人の飲酒状況について	9	3.2
その他	3	1.1

法が改正されたばかりで、飲酒運転の罰則基準が大幅に強化されたにもかかわらず、知識は約60%程度である。

現代社会では車は必須の生活道具になり、その自動車関連産業に携わろうとしている本学の学生は、より豊かで多面的な知識を持つべきであり、交通違反・事故の社会的責任^{14,15)}は職を失うほど重くなったことをも認識すべきであろう。

（4）飲酒の有無

飲酒の有無を図4に示す。190人、67%の学生が飲酒をする。飲まない者は93人、33%であった。

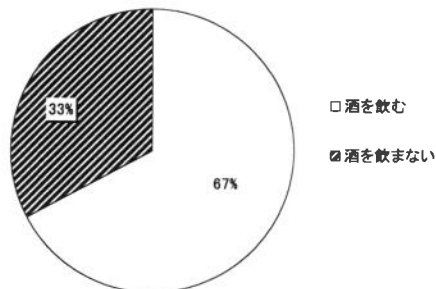


図4 飲酒の有無

（4）-1 飲酒者（190人、67%）について

①飲酒嗜好についてみたものを表3に示す。酒が好き者43.7%で、どちらともいえない者が53.2%であり、飲酒をするが好きではない者が3.2%であった。

表3 酒の嗜好

	N	%
好き	83	43.7
どちらともいえない	101	53.2
好きではない	6	3.2
計	190	100.0

②現在の飲酒の状況を表4に示す。よく飲むもの13.2%で、つきあい程度に飲む者が80.0%、全く飲まない者が6.8%であった。

表4 現在の飲酒状況

	N	%
良く飲む	25	13.2
つきあい程度に飲む	152	80.0
全く飲まない	13	6.8
計	190	100.0

③飲酒の開始時期についてみたものを表5に示す。飲酒開始の多い順からみると、高校1年が28.4%、中学2年が15.3%、ついで中学3年13.7%であり、この間（中学2～高校1）で57.4%を占めている。大学生になってからの飲酒は僅か5.8%であった。

表5 飲酒の開始時期

	N	%
大学生頃	11	5.8
高3頃	22	11.6
高2頃	16	8.4
高1頃	54	28.4
中3頃	26	13.7
中2頃	29	15.3
中1頃	15	7.9
小学生頃	17	8.9
未だ飲んだことがない	0	0.0
計	190	100.0

この実態から飲酒に対する教育活動は少なくとも中学生から一貫して教育指導しなければならないことが伺われる。

④飲酒のきっかけについてみたものを表6に示す。つき合いが49.5%で圧倒的に多い。次いで好奇心が28.9%、親の薦めが12.6%、コンパは僅か4.7%であった。

前の項目でみたように、飲酒開始は中2～高1であり、その飲酒のきっかけは「つき合い」であることがわかる。これに加え、親のすすめによる飲酒が12.6%あり、飲酒に対する寛容な家庭環境があるものと思われる。

⑤酒の種類はビールが最も多く57.4%，果実酒15.8%，カクテル7.9%，日本酒7.4%，焼酎・ウイスキーがそれぞれ4.2%の順で、ワインは2.1%であった。本学の学生はビールが圧倒的に多い。

⑥飲酒場所についてみたものを表7に示す。居酒屋の様な一杯飲み屋が最も多く、34.2%で、次いで友人・知人宅が30.5%，自宅が22.1%，下宿が10.5%であった。これらの友人・知人宅，自宅，下宿を合わせると63.1%であり，あまり金のかからない飲み方をしているものと思われる。

⑦飲酒の理由についてみたものを表8に示す(複数回答)。高い割合からみると，気分転換が27.3%，つき合いに必要が21.5%，特に理由はないが18.7%，酒の味が好きだからが14.9%，酔うための7.3%，疲れをとるため4.4%，食欲増進のための0.7%で，その他が5.2%であった。気分転換，つき合い，特に理由はない等の飲酒はいずれも酒の直接的な効果を求めているものではなく，強いていえば人間関係或いは精神衛生面に酒の効用を求めているものと推測される。反面，酔うため・疲れをとるため・飲みたいから飲むといったこれらの飲酒は「酒に酔う楽しみ」であり，酔いたいために飲酒をするということは，基本的にアルコール依存者の飲み方と変わらないことになる。

⑧飲酒の頻度についてみたものを表9に示す。毎日飲むが0.5%（1名），週4日以上飲むが2.6%，週2～3日飲むが11.6%，週1日位が14.2%で，不規則だが飲むときは偏るが43.2%，殆ど飲まないが27.9%であった。

定期的に飲んでいる者を，青山らの分類^{16,17)}によって分類すると，常習飲酒者が3.1%，習慣飲酒者が25.8%いる。これらの学生はアルコール依存症の予備軍とも思われる。

⑨飲酒時の顔面紅潮についてみたものを表10に示す。赤くなるが42.6%，少し赤くなるが25.8%で，変わらない者が32.1%で，青くなる者が0.5%いた。赤くなる・少し赤くなるをあわせて67.4%になる。顔面紅潮はアセトアルデヒド (ALDH) の代謝に関係^{12,13,18)}する。日本人はAL

表6 飲酒のきっかけ

	N	%
付き合い	94	49.5
コンパ	9	4.7
好奇心より	55	28.9
親の薦め	24	12.6
その他	8	4.2
計	190	100.0

表7 飲酒の場所

	N	%
自宅	42	22.1
下宿	20	10.5
友人・知人宅	58	30.5
居酒屋等	65	34.2
スナック	0	0.0
バー・キャバレー	2	1.1
その他	3	1.6
計	190	100.0

表8 飲酒の理由

	N	%
気分転換のため	79	27.3
付き合いに必要だから	62	21.5
特に理由なし	54	18.7
酒の味が好き	43	14.9
酔うため	21	7.3
その他	15	5.2
疲れをとるため	13	4.5
食欲増進のため	2	0.7
大人だから飲むのが当然	0	0.0
計	190	100.0

表9 飲酒の頻度

	N	%
毎日飲む	1	0.5
週4回以上	5	2.6
週2回～3回位	22	11.6
週1回位	27	14.2
ほとんど飲まない	53	27.9
不規則だが偏る	82	43.2
計	190	100.0

DH 2 型欠損が多いことが知られている。本調査でも 6～7 割の学生が顔面紅潮を示していることから ALDH 2 型欠損例であることが推定できる。

⑩酒に強いか弱いかについてみたものを表11に示す。強いと思っているいる者が12.1%で、弱いと思っている者が37.4%、普通と思っている者が43.2%で、わからない者が7.4%であった。⑨の項目でみたようにALDH 2 型欠損例が多いにもかかわらず、人並み程度と思っている者が多いことがわかる。

⑪飲酒時の状態についてみたものを表12に示す。陽気で朗らかになる者が46.8%で最も高かった。次いで飲んでも変わらないが30.5%で、眠くなるが11.6%、沈む4.2%、意識が薄らぐ3.2%、気が大きくなるが2.1%、乱暴になるが1.0%、頭がさえるが0.5%であった。飲酒時の酩酊状態がそれぞれ個々に把握されているものと思われるが、「眠くなる・沈む・意識が薄らぐ・気が大きくなる・乱暴になる」これらは酔いの程度（爽快期・ほろ酔い初期・酩酊前期・酩酊期・泥酔期・昏睡期）からみると酩酊前期或いは酩酊期に属し、いわゆる危険な飲み方と言える。

⑫1ヶ月あたりの飲酒費用についてみたものを表13に示す。1,000円以下が58.4%、3,000円以下が23.7%、5,000円以下が8.9%、5,000円以上が8.9%であった。飲酒の費用としては金のかからない学生らしい費用かと思われるが、飲酒の場所をみると、「居酒屋」で飲む者が多いこと、また飲酒頻度などを勘案するとかなりの出費があるものと思われる。

⑬クラブ活動やサークル活動等で飲酒する機会の有無についてみたものを表14に示す。機会のある者は僅か7.4%であった。本学はクラブ・サークル活動が盛んではないため、こうした機会はほとんどないものと思われる。

⑭飲酒に対する意識として、学生として多く飲む方かどうかについてみたものを表15に示す。他の学生と比較して飲酒量は少ないと思っている者が多いことが伺われる。

⑮学生生活で飲酒は必要か否かについてみたものを表16

表10 飲酒時の顔面紅潮

	N	%
赤くなる	81	42.6
少し赤くなる	49	25.8
変わらない	59	31.1
青くなる	1	5
計	190	100.0

表11 酒に強いかどうか

	N	%
強いと思う	23	12.1
普通	82	43.2
弱いと思う	71	37.4
わからない	14	7.4
計	190	100.0

表12 飲酒時の状態

	N	%
陽気で朗らか	89	46.8
沈む	8	4.2
眠くなる	22	11.6
気が大きくなる	4	2.1
乱暴になる	1	0.5
意識が薄らぐ	6	3.2
頭がさえる	1	0.5
変わらない	58	30.5
計	190	100.0

表13 1ヶ月あたりの飲酒の費用

	N	%
5千円以上	17	8.9
3千円以上～5千円未満	17	8.9
千円以上～3千円未満	45	23.7
千円未満	111	58.4
計	190	100.0

表14 クラブ活動で飲む機会があるか

	N	%
ある	14	7.4
ない	176	92.6
計	190	100.0

表15 学生として多く飲む方か

	N	%
多く飲む方だと思う	12	6.3
普通	63	33.2
少ない方だと思う	102	53.7
わからない	13	6.8
計	190	100.0

に示す。必要・時に必要と肯定意見が70.0%で、必要ではないとする否定意見が13.2%、わからないとする者が16.8%であった。飲酒の理由の項でみたように、「つき合いに必要」の割合が高いのからみても、人間関係を重視していることがわかる。

⑯飲酒に関する問題行動として、二日酔いで学校を休んだり、遅刻したことの有無についてみたものを表17に示す。良くある・たまにあるが13.1%で、これらは憂慮すべきことである。

⑰飲酒による事故についてみたものを表18に示す。交通事故はないものの、他人に迷惑をかけたが5.3%、怪我をしたが1.1%であった。本学は自動車に関する教育現場なので、飲酒運転・酒気帯び運転及び交通事故については、絶対に起きないように日頃から徹底した教育指導が必要である。

⑱イッキ飲みを経験の有無について表19に示す。イッキ飲みをしたことのある者が62.1%と非常に高い割合を示した。

また共に飲んでいる仲間がイッキ飲みで意識不明の状態に遭遇したことの有無についてみたものを表20に示す。15.8%の者が急性アルコール中毒に遭遇していることになる。また飲酒して体に異常がおき病院へ行ったことがある者が2名あった。

急性アルコール中毒の症状について知っているか否かについてみたものを表21に示す。23.2%が知らないと回答している。

このように、イッキ飲みは、コンパなどで、ゲーム感

表16 学生生活における飲酒の必要性

	N	%
必要と思う	17	8.9
時に必要	116	61.1
必要でない	25	13.2
わからない	32	16.8
計	190	100.0

表17 二日酔いで学校を欠席

	N	%
よくある	5	2.6
たまにある	20	10.5
ない	195	86.8
計	190	100.0

表18 飲酒による事故

	N	%
交通事故を起こした	0	0.0
けがをした	2	1.1
他人に迷惑をかけた	10	5.3
家族に迷惑をかけた	0	0.0
ない	178	93.7
計	190	100.0

表19 イッキ飲みを経験

	N	%
ある	118	62.1
ない	72	37.9
計	190	100.0

表20 共に飲んでいる者がイッキのみで意識不明

	N	%
ある	30	15.8
ない	157	82.6
わからない	3	1.6
計	190	100.0

表21 急性アルコール中毒症状の知識

	N	%
知っている	146	76.8
知らない	44	23.2
計	190	100.0

覚で多量のアルコールを一息で飲み干し、この時に皆で大声であおって、さらに立て続けに飲ませる。ある大学¹⁹⁾では「伝統」の名の下に強制し、あらかじめバケツまで用意をして泥酔状態にする。これを行事として行っているところがまだまだ多くあるという。

大学生協連の調査²⁰⁾では、学生総合共済に加入している約70万人の学生のうち急性アルコール中毒による入院は1998年度は136件あり、前年比32%も増加したという。近年ではこの様な飲酒行動が、高校生にまで及んでいるという。

①9飲酒する女子大生についてどのように思っているかみたものを表22に示す。女子大生の飲酒を肯定する者が26.8%で、否定する者が11.1%で、肯定も否定もしない者が62.1%であった。

表22 飲酒する女子大学生について

	N	%
良いことだと思う	51	26.8
良くないことだと思う	14	7.4
やめるべきだ	7	3.7
なんともいえない	99	52.1
わからない	19	10.0
計	190	100.0

②0人生で酒は有益かどうかについてみたものを表23に示す。有益・時に有益が71.0%と圧倒的に多く、否定者が10.0%であった。これらは自らの飲酒を肯定している者と思われる。

表23 人生で酒は有益か

	N	%
有益だと思う	23	12.1
時に有益	112	58.9
思わない	19	10.0
わからない	36	18.9
計	190	100.0

②1飲酒時の喫煙状況についてみたものを表24に示す。喫煙する者が多く61.1%であった。この中でいつもの喫煙本数より、飲酒時の喫煙本数が多くなる者が56.9%であった。喫煙者は飲酒すると喫煙本数も増える者が圧倒的に多いことがわかる。

表24-1 飲酒時の喫煙

	N	%
吸う	116	61.1
吸わない	74	38.9
計	190	100.0

表24-2 飲酒者の喫煙状況

	N	%
通常時より本数が増える	66	56.9
いつもと同じ	37	31.9
少なくなる	13	11.2
計	116	100.0

②2両親の飲酒についてみたものを表25に示す。父親の飲酒は82.1%で、母親の飲酒は59.5%で、いずれも高い割合である。飲酒のきっかけでみたように「親のすすめ」が12.6%あり、家庭においてもこの様な環境下にあるものと思われる。

表25-1 父親の飲酒

	N	%
飲む	156	82.1
飲まない	31	16.3
わからない	3	1.6
計	190	100.0

表25-2 母親の飲酒

	N	%
飲む	113	59.5
飲まない	65	34.2
わからない	12	6.3
計	190	100.0

②③身近な者でアルコール依存症と思われる者が居るかどうかについてみたものを表26に示す。14.7%の者が居ると回答している。

②④本人の健康状態についてみたものを表27に示す。あまりよくない・悪いが合わせて12.7%であった。これらの健康状態は(1)の項における通学方法別に生活習慣、特に食生活を調査し、検討することが必要と思われる。

(4) - 2 非飲酒者 (93人, 33%) について

①飲酒しない理由についてみたものを表28に示す。酒が飲めない理由について、高い割合から見ると、酒がまったく飲めない、飲めない体質、飲むと苦しくなる、酒は体に悪い、酒を飲んで失敗したの順であった。しかし、その他の項が31.2%を占めた。その内容は飲酒(飲む飲まない)すること事態を別に意識していないものと思われる。

②飲酒者に対してどのように思っているのか、みたものを表29に示す。飲みたい者は飲めばよいが50.5%で最も高く、何とも思わないが29.0%で、酔っぱらいは嫌いだ11.8%で、反対に飲める者はうらやましいが8.6%であった。非飲酒者は飲酒者に対しても特別な意識は無いものと思われる。

③飲酒者に誘われた時の対処についてみたものを表30に示す。断るが6.5%で、飲めないがつき合うが37.6%、雰囲気が好きだからつき合う25.8%であり、その時になつてみないとわからないという者が28.0%であった。63.4%の者が誘われればつき合うと言う。つまり人とのつき合い、人間関係を大切にしているものと思われる。

④女子大生の飲酒についてみたものを表31に示す。止めるべきだ・よくないことだと女子大生の飲酒を否定する意見は26.9%、良いことだと肯定する意見が7.5%であった。何とも言えない・わからないが65.6%であった。飲酒者(表22)の否定意見は11.1%で、肯定意見は26.8%であった ($p < 0.01$)。

表26 身近な者でアル中はいるか

	N	%
ある	28	14.7
ない	125	65.8
わからない	37	19.5
計	190	100.0

表27 健康状況

	N	%
健康である	69	36.3
普通	93	48.9
あまり良くない	19	10.0
悪い	4	2.1
わからない	5	2.6
計	190	100.0

表28 酒を飲まない理由

	N	%
酒が全く飲めない	20	21.5
飲むと苦しくなるから	13	14.0
飲めない体質	17	18.3
酒のおいが嫌い	0	0.0
酒は体に悪い	11	11.8
酒を飲んで失敗した	3	3.2
その他	29	31.2
計	93	100.0

表29 飲む者について

	N	%
飲みたい者は飲めばよい	47	50.5
酔っぱらいは嫌いだ	11	11.8
何とも思わない	27	29.0
飲めるものはうらやましい	8	8.6
計	93	100.0

表30 誘われたときの対処

	N	%
雰囲気が好き	24	25.8
飲めないがつきあう	35	37.6
断る	6	6.5
わからない	26	28.0
その他	2	2.2
計	93	100.0

表31 女子学生の飲酒について

	N	%
やめるべきだ	6	6.5
良くないことだ	19	20.4
何ともいえない	50	53.8
わからない	11	11.8
良いことだ	7	7.5
計	93	100.0

表32 人生で酒は有益か

	N	%
有益だと思う	7	7.5
時に有益	48	51.6
思わない	18	19.4
わからない	20	21.5
計	93	100.0

⑤人生で酒は有益かについてみたものを表32に示す。有益・時に有益が合わせて59.1%で、有益と思わないが19.4%で、わからないが21.5%であった。この項目は飲酒者（表23）も非飲酒者もほぼ同様の割合を示した。

⑥急性アルコール中毒症状の知識についてみたものを表33に示す。知っている者が73.1%で、知らない者が26.9%であり、飲酒者（表21）・非飲酒者を問わずほぼ同様の割合を示した。

⑦身近な者にアルコール依存症と思われる者が居るか否かについてみたものを表34に示す。居ると回答した者が5.4%であった。飲酒者（表26）の割合（14.7%）と比較すると飲酒者の身近な人にアルコール依存症が多いことがわかる（ $p < 0.05$ ）。

⑧両親の飲酒状況についてみたものを表35に示す。父親の飲酒は64.5%で、母親の飲酒は38.7%であった。飲酒者の両親（表25-1, 25-2）と比較すると非飲酒者の両親は、飲まない割合が低い（父親 $p < 0.05$ ）（母親 $p < 0.01$ ）。

表35-1 父親の飲酒

	N	%
飲む	60	64.5
飲まない	29	31.2
わからない	4	4.3
計	93	100.0

表35-2 母親の飲酒

	N	%
飲む	36	38.7
飲まない	52	55.9
わからない	5	5.4
計	93	100.0

⑨非飲酒者の喫煙状況についてみたものを表36に示す。非喫煙者が58.8%と圧倒的に多かった。飲酒者（表24-1）との間に有意な差（ $p < 0.001$ ）が認められた。

⑩現在の健康状態についてみたものを表37に示す。あまりよくない・悪いが15.0%であったが、飲酒者（表27）

表33 急性アルコール中毒の知識

	N	%
知っている	68	73.1
知らない	25	26.9
計	93	100.0

表34 身近な者でアルコール依存症の者はいるか

	N	%
いる	5	5.4
いない	74	79.6
わからない	14	15.1
計	93	100.0

表36 喫煙状況

	N	%
吸う	30	32.3
吸わない	54	58.1
禁煙中	9	8.7
計	93	100.0

と比較してもほぼ変わらない割合であった。従って飲酒の有無による体調不良ではないと思われる。これらの者には生活習慣を調査することが必要と認められる。

む す び

飲酒者の傾向は、中学2年生から高校1年生の3年間が飲酒を始める時期で、きっかけはつき合いで飲酒する。これに加えて、家庭では寛容、酒屋・コンビニで購入すれば簡単に手に入る、焼き肉屋・居酒屋で飲んでもとがめられない。学校の行事の打ち上げで飲んでも顧問の先生は黙認、このような社会的環境の中では飲酒しても何ら抵抗感も感じられず、むしろ公認と言った感がいなめない。このように日本は酒に対する寛容な社会的背景が風潮として存在する。

非飲酒者は自分自身の飲酒に関しては約80%の者が無関心であるが、しかし人間関係を重視し、飲酒を誘われればつき合い、あるいは人生で酒は有益と肯定する者が多い傾向である。非飲酒者も飲酒に関して寛容さがみとれる。

大学生の飲酒場所は居酒屋の様な一杯飲み屋が多く、金のかからない飲み方をしているものの、酒の直接的な効用を求める飲み方をする者も少なくない。問題飲酒では、「イッキ飲み」では経験のある者が6割を越えている。幸い本学では救急車・病院に世話になったという報告は今までに無いが、しかし飲酒者の6割を越える学生が経験していることからすると、いつこの様な事態が起きても不思議ではない。従って放置することはできない問題といえよう。法的には20歳未満の未成年者飲酒禁止法（本学の学生の大半は20歳未満である。）、酩酊者規制法等がありながら、その取り締まりは殆ど実施されていないし、また事故が起き、傷害致死罪或いは傷害現場助勢罪で告訴¹⁹⁾しても死亡者は帰らない。

平成10年の東京都消防庁調べ²⁰⁾による急性アルコール中毒の救急搬送数、10,868人中20歳未満1,211人、20歳代が5,295人と言う。この様に学生に多いイッキのみの事故に対して、大学側に防止の動きがある²¹⁾が、パンフレットで、事故例を紹介、怖さを説く映画・ビデオ、体質の測定（パッチテスト）等々、しかしいっこうに無くならない。

初等中等教育および高等教育での生命科学つまり自分の健康は自分で守るといった健康科学教育の欠如と思われる。

この様な社会状況があり、さらに我が国の教育現場における飲酒に関する教育は、初等中等教育課程の中で、保健体育の保健編で扱われている。新指導要領における飲酒教育の位置づけは、中学校では^{22,23)}「病気の予防」で喫煙、薬物乱用防止と同列に扱われ、その行為は心身に様々な影響をあたえ、疾病の要因になることを理解させる内容であり、心身の急性影響を中心に上げることが示されている。高等学校^{24,25)}では「現代社会と健康問題」で取り上げられている。いず

表37 健康状況

	N	%
健康である	23	24.7
普通	51	54.8
あまり良くない	11	11.8
悪い	3	3.2
わからない	5	5.4
計	93	100.0

れも喫煙，薬物乱用防止とともに健康との関連について理解させる内容である。

教育活動では「飲酒で何をねらいとし，どう教えるのか」が問われなければならない。つまり飲酒教育はその独自性と多面的・多角的に取り扱うことが必要で，アルコールの乱用防止・健康障害・禁酒教育に留まるものではなく，健康行動の成立には意志決定能力が大切である。従って責任あるアルコール飲料を目指す飲酒教育が今後は必要と思われる。

参 考 文 献

- 1) 水野敏明他：大学生の飲酒調査－第一報－中日本自動車短期大学生の実態について，中日本自動車短期大学論叢，第17号；131-137，1987
- 2) 水野敏明他：大学生の飲酒に関する研究，教育医学33（4）；191-197，1988
- 3) 水野敏明他：大学生の飲酒とストレスに関する調査研究－中日本自動車短期大学生について，中日本自動車短期大学論叢，第28巻；103-112，
- 4) 水野敏明他：大学生の飲酒に関する研究，第7回 日・韓健康教育シンポジウム兼第45回日本教育医学会大会；1997. 8. 22. 韓国・梨花女子大学校
- 5) 中日新聞：津高生脱線酒盛り，文化祭打ち上げ；1988. 10. 1.（朝刊）
- 6) 中日新聞：高校生脱線酒盛り；1989. 9. 8.（朝刊）
- 7) 中日新聞：中学生の5%飲酒の習慣；1992. 10. 10.（朝刊）
- 8) 中日新聞：アルコールハラスメントの悲劇なくそう；2000. 3. 10.（朝刊）
- 9) 中日新聞：寺原飲酒で嚴重注意；2002. 4. 12.（朝刊）
- 10) 中日新聞：酒に寛容・大人も問題；2002. 10. 21.（朝刊）
- 11) 中日新聞：新入生ら急性アル中；2002. 4. 9.（朝刊）
- 12) 水野敏明他：21世紀の健康学；200-207，みらい，1996
- 13) 水野敏明他：新健康の科学；137-153，中央法規出版，1990
- 14) 中日新聞：酒気帯び運転の基準きびしく；2002. 5. 23.（朝刊）
- 15) 中日新聞：酒気帯び対象大幅拡大；2001. 12. 21.（朝刊）
- 16) 青山莞爾：大学生の飲酒様態と集団の問題飲酒の指標；アルコール研究と薬物依存，17（1），51-73，1982
- 17) 青山莞爾：理科系大学生の飲酒実態；第16回日本アルコール医学会総会誌，16（4），95-96，1981
- 18) 大森正英：アルコール関連問題－飲める人，飲めない人；保健の科学，34（11），785-789，1992，11，
- 19) 中日新聞：大同工大事件で刑事告発；1996. 7. 5.（朝刊）
- 20) 中日新聞：死のゲームイッキ飲み；1999. 4. 2.（朝刊）
- 21) 朝日新聞：学生に多い一気飲みの事故大学側に防止の動き；1992. 6. 12.（朝刊）
- 22) 松田岩男他：中学校保健体育；120-123，学研，1996
- 23) 小林伸二：中学保健学習ノート；30-31，正進社
- 24) 高石昌弘他：現代高等保健体育；18-19，大修館書店，1999

- 25) 横地千仍他：図説現代高等保健；24-27，大修館書店，1999